

# 百科事典の東西

— 18世紀 知のあり方を比較する —



『和漢三才図会』（日本）



『百科全書』（フランス）

時は18世紀、江戸時代中期の日本と、フランス革命を間近にひかえたフランスと、洋の東西に出現したふたつの百科事典—『和漢三才図会（わかんさんさいずえ）』とL'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers（いわゆる『百科全書』）。世界を総体的に把握しようとする百科事典の試みは、日本とフランスと、双方でいかなる形をとったのでしょうか。本学図書館収蔵の貴重資料の中から、今回は2種類の百科事典を対比的に展示することで、18世紀の「知」のあり方を洋の東西の比較をまじえてご覧いただこうと思います。いずれも豊富な図版が目を楽しませてくれますが、時にはその素朴さに笑みを誘われ、時にはその精妙さに溜息をつき、またどこか首をかしげたくなるようなところも見つかるでしょう。

なお参考として、江戸時代の印刷技術を伝える資料である版木と、その版木から刷り出された書物も展示いたします。それは、東西の百科事典の出版形態を考えることにもなるからです。



# 東（日本）

## 和漢三才図会

### 編者

『和漢三才図会』は、寺島良庵が江戸中期（18世紀初頭）に編纂した、日本の百科事典です。良庵はもと秋田の商家に生まれましたが、学問を志して大坂に出、はじめ伊藤玄良、のちに和気仲安に師事して本草学や医学を学びました。林鳳岡の序文にも「浪速の医士」と呼ばれており、本業は医者でした。自序によれば、「医学を究めるためには森羅万象を知り尽くしておかなければならない」という師の教えに従って、本書を編んだのだといえます。生没年は未詳です。

### 構成

本書は総巻数105巻の堂々たる大著です。書名の「三才」とは、天・地・人、すなわち天空と大地、そしてその間に生きている、人間を含めたあらゆる動物、の意です。よってその構成は、まずはこの天・人・地の三部門に分かれています。天部はさらに、天文・天象・時候・歴占・吉凶など、人部は人倫・異国・芸能・楽器・兵器・動物・鳥類・魚介類・甲殻類など、地部は山類・水類・火類・中国および日本の地誌・樹木・草類・穀類などに分けられ、5000近い項目の多くに図版が掲げられているのが特徴です。正徳5年（1715）に刊行されました。



### 成り立ちと役割

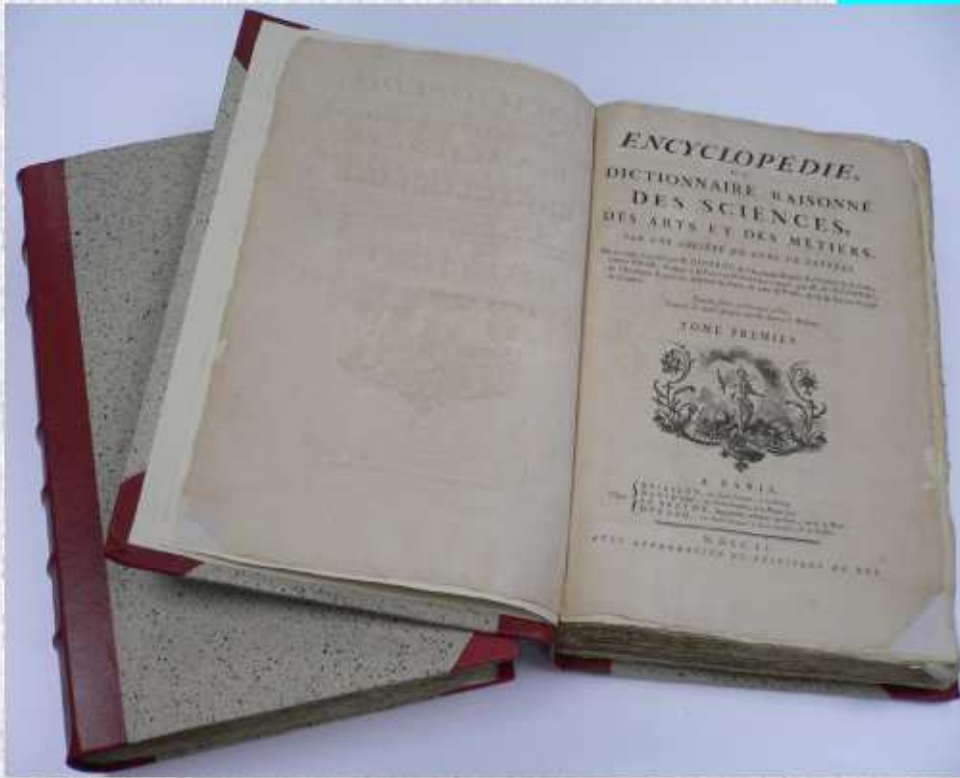
中国・明の王圻が編んだ『三才図会』全106巻にならひ、これに日本の事物をも加えて考証したものが本書です。日本は文化的先進国であった中国に、哲学から自然科学にいたる広い分野で、大きな影響を蒙ってきました。本書においてもそれは例外ではありません。各項目の解説冒頭に、『三才図会』あるいは明の李時珍編『本草綱目』が「定説」として引用される場合が多いのはそれを象徴的に物語っています。しかし良庵は、同じ事物でも、わが国におけるその異名や生態の特徴などを詳しく考証しているのみならず、中国の百科事典には記載されない、日本の風俗や生活用具類なども図解してくれています。その意味で、本書は同時代の文学作品を読む上でも重要な文献となっています。

【参考文献】※本学図書館の所蔵であり自由に閲覧することができます。  
 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会』1～18（平凡社東洋文庫）  
 ＊本書が分かりやすく口語訳されています。  
 和漢三才図会刊行委員会編『和漢三才図会』（東京美術）上・下  
 ＊本書の原本を縮小して全篇を収録しています。

### 『和漢三才図会』刊行前後

- 一五九六（明）李時珍『本草綱目』刊行。
- 一六〇三 徳川家康、江戸幕府を開く。
- 一六〇七（明）王圻『三才図会』刊行。
- 一六二七『本草綱目』の日本版が出版される。
- 一六六六 中村惕斎『訓蒙図彙』を刊行。
- 一六八四 渋川春海、幕府初代天文方となる。
- 一七〇二 赤穂浪士大石良雄ら四十七人で吉良を討つ。
- 一七〇七 富士山宝永大噴火
- 一七〇八 貝原益軒『本草和名』刊行。
- 一七〇九 徳川家宣が江戸幕府第六代將軍に。幕府、新井白石を登用（正徳の治）。
- 一七一三 和漢三才図会完成。
- 一七一五 和漢三才図会刊行。
- 一七一六 新井白石『西洋紀聞』成立。
- 一七二六 徳川吉宗が江戸幕府第八代將軍に。新井白石らを罷免す。
- 一七二七 大岡忠相越前守が江戸町奉行就任。
- 一七二〇 江戸大火。
- 一七二一 幕府、小石川薬園を設ける。
- 一七二八 徳川吉宗の要請により、ベトナムから象二頭が来日。この直後、象に関する文献多数刊行される。
- 一七三三 建部賢弘・中根元圭『暦算全書』（清・梅文鼎編）を翻訳し、西洋天文学を紹介。
- 一七四一 野呂元文『阿蘭本草和解』成立。
- 一七七四 前野良沢・杉田玄白『解体新書』刊行。
- 一七八二 天明の大飢饉。（八八年まで）
- 一七八七 徳川家斉が江戸幕府第十一代將軍に。
- 一七九八 本居宣長、『古事記伝』を完成。
- 一八〇〇 伊能忠敬、蝦夷地の測量に向かう。
- 一八〇二 小野蘭山『本草綱目啓蒙』刊行。





編者

『百科全書』は、ディドロ (Denis Diderot, 1713-1784) とダランベール (Jean Le Rond d'Alembert, 1717-1783) が18世紀フランスの啓蒙思想を集大成したものです。完成までに20年以上の歳月 (1751-1772) がかかっています。

執筆者はディドロとダランベールのほかに、ヴォルテール、モンテスキュー、ルソーなど錚々(そうそう)たる啓蒙主義者たちです。

構成

本書は本文 (texte) と図版 (planché) から成る全28巻の初版本です。科学、芸術及び職業についてアルファベット順に詳しく解説しています。本文は第1巻 (1751) から第17巻 (1765年) までです。図版は第1巻

(1762年) から第11巻 (1772年) までです。初版本の上梓の後に、全4巻の補遺 (supplément) が1776年から1777年にかけて、また図版の続きとして第12巻が1777年に、更に全2巻の目次 (table des matières) が1780年に出版されます。

成り立ちと役割

本書は啓蒙思想によって18世紀当時の人々を偏見や無知の状態から解放するために編集されたものです。啓蒙思想は人の尊厳を強調し、人を偏見や無知から解放しようとする考え方です。この考え方は古い体制 (アンシャン・レジーム) を変えようとする実践的な動きとなっていきます。その頂点が1789年のフランス革命です。

フランス革命は、世界の社会制度や国家制度の枠組みの形成に大きな影響を与えます。今日の世界の社会制度や国家制度は、フランス革命に由来すると言っても過言ではありません。本書は人類史上に不滅の価値を有するフランス革命を準備した思想的な源です。

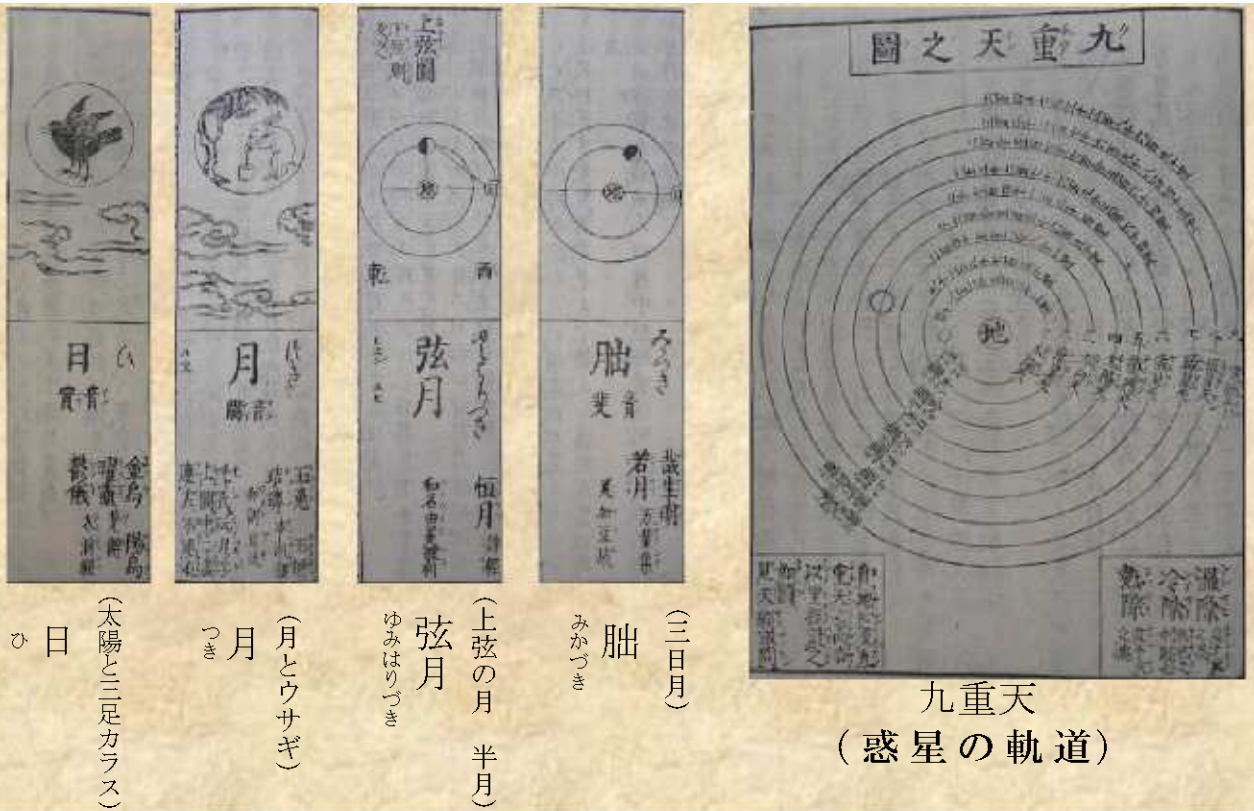
【参考文献】※本学図書館の所蔵であり自由に閲覧することができます。ジャックブルースト監修・解説『フランス百科全書絵引』(平凡社) 百科全書にはたくさんの絵 (図) が記載されています。これらについて解説したのが本書です。百科全書の図版は銅版画を用いて精密に描かれており、当時の技術力の高さを垣間見ることができます。

『百科全書』刊行前後

- 一四四五頃 グレーテンベルク、活版印刷を完成。
- 一五四三 コペルニクス、『天体の回転について』を刊行。
- 一六三二 ヴェザリウス、『人体の構造』を刊行し、人体の解剖図を掲載。
- 一六七五 ガリレオ『天文対話』を刊行。
- 一六八七 イングランド国王チャールズ二世、グリニッジ天文台を設計。
- 一七一五 ニュートン、『プリンキピア』を刊行し、自然現象を万有引力の法則で説明。
- 一七三三 ルイ十五世即位。
- 一七三四 ヴォルテール、『哲学書簡』を刊行し、ニュートン物理学をフランスに紹介。
- 一七三五 リンネ、『自然の体系』を刊行。
- 一七四三 ダランベール、『動力学論』を刊行。
- 一七四六 デイドロ、ジェームズの『医学事典』を伝記。
- 一七四九 ビュフォン、『自然誌』(全三十六巻)を刊行 (一七八八年)。
- 一七五一 『百科全書』(本文) 刊行 (一六五五年) 七年戦争 (一六三三年)。
- 一七五七 ハラー、医学百科事典を刊行。
- 一七六〇 ロンドンのキュー植物園開園。
- 一七六二 『百科全書』(図版) 刊行 (一七二二年) オーストリアのウィーンにあるシエンブルン動物園が、一般公開される。イギリスで『ブリタニカ百科事典』が開始される。(一七七一)
- 一七六八 ワット、新方式の蒸気機関を開発。
- 一七六九 ルイ十六世、即位。
- 一七七四 『百科全書』(補遺) 刊行 (一七七七年) 『百科全書』(目次) 刊行。
- 一七八〇 三部会の招集。フランス革命、勃発。
- 一七八九 ルイ十六世、処刑。
- 一七九三



# 和漢三才図会（日本）



日 (太陽と三足カラス)

月 (月とウサギ)

弦月 (上弦の月 半月)  
ゆみはりつき

朏 (二日月)  
みかつき

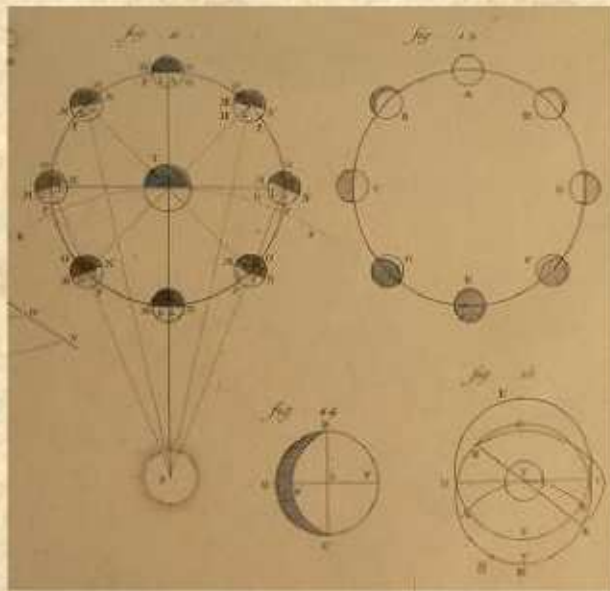
九重天 (惑星の軌道)

## 天体

私たち現代人は、たとえば江戸時代の人々のイメージの連鎖（月とウサギ）を取りあげて、昔の人は科学的知識とは無縁な、迷信の世界に住んでいたと考えがちです。しかし洋の東西を問わず、太陽と月と地球の位置関係の変化に応じて月の見え方が変化することや、私たちが住んでいる大地は球形をしていること（地球説）を、当時の知識人は現代人に劣らず正確に理解していました。ちなみに、地球説は織田信長の時代に日本に紹介されています。

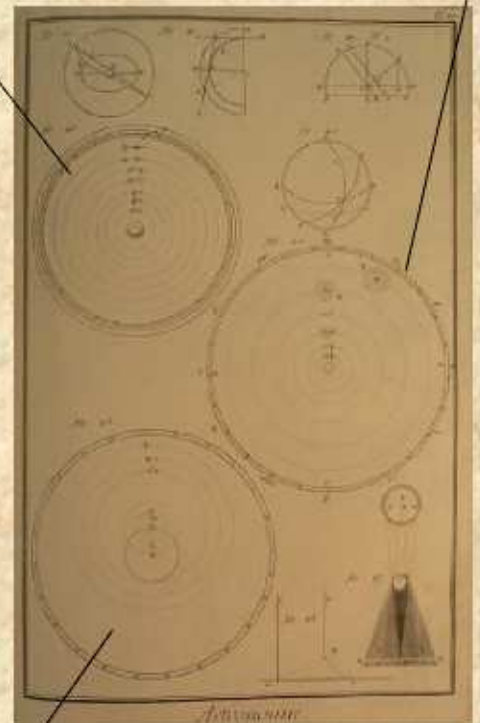
また『和漢三才図会』の「九重天之圖」で描かれている惑星の位置関係は、『百科全書』で描かれたプトレマイオスの体系と同じです。フランスで『百科全書』が出版された頃には日本でも地動説が紹介されています。中国や欧州の新知识は、「鎖国」しているはずの日本にも次から次に紹介されていたのです。

# 百科全書（フランス）



月の位相

コペルニクスの体系  
プトレマイオスの体系



ティコ・ブラーエの体系



うさぎ  
兔



くま  
熊



ぞう  
象



きりん  
麒麟



こだま  
彭侯



しょうじょう  
猩猩

ほ乳類等

世界の事物を網羅する百科事典である以上、ウサギやクマといった身近な動物だけではなく、諸外国に生息する動物や、本当に存在するのか分からない未知の動物たちも登場します。たとえば『和漢三才図会』の「麒麟」は、われわれが知っているそれとは全く別物です。「麒麟」は中国でも伝説上の動物とされていますが、それをそのまま写し取ったものです。

一方『百科全書』の「キリン」はたいへん写実的に見えますが、しかしよく見ると、これもどことなく不正確さが残ります。また『図会』の「猩猩」や、『全書』の「オランウータン」などには、どこかしら擬人化された愛らしい表情が窺えます。これも<未知>なるがゆえなのでしょう。

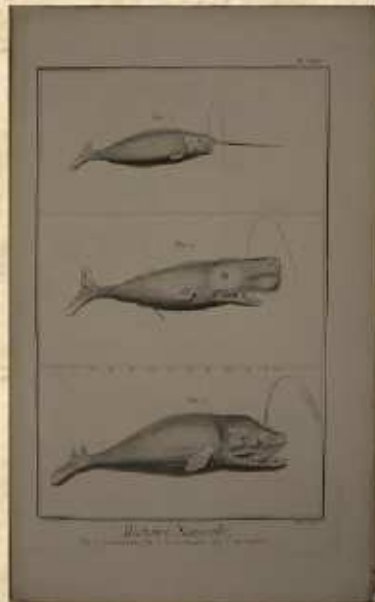


上 ZEBRE  
シマウマ

下 DROMADAIRE  
ヒトコブラクダ



GIRAFFE  
キリン



上 NARWAL  
イッカク

中 CACHALOT  
マッコウクジラ

下 BALEINE  
(ヒゲ) クジラ



左 JOCKO  
オランウータン

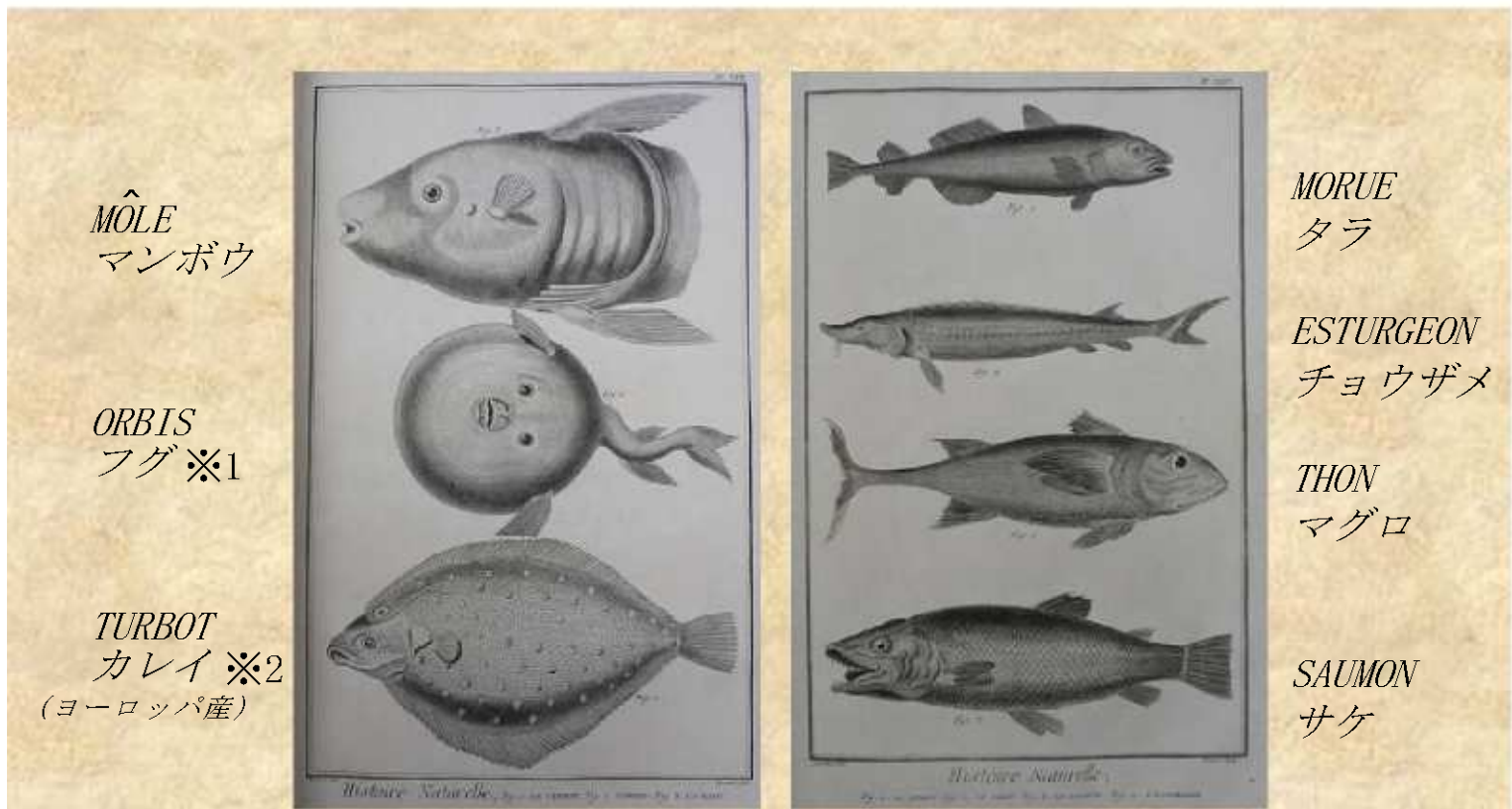
右 GIBBON  
テナガザル





魚類

「鰯」「鱒」のように、国字（日本で作られた漢字）には魚扁のものが多く見られることから知られる通り、日本人は古くから多くの魚種に囲まれて生活してきました。「鯨」や「鮠」も身近な魚類でした。ちなみに、「干鮭」（解説には秋田や松前で多く作るとあります）のような加工品の図が併せて示されるのは『和漢三才図会』の魚類では「鮭」の項だけです。他に比してやや稚拙な絵は、実物を見ることがなかった絵師が、秋田出身の編者良庵の指示をもとに描いたものでしょうか。『図会』と比較すると相対的に『百科全書』掲載の魚類は極めて少ないのですが、銅版による細密な描線が魚の皮膚の質感をよく表現しています。また、さすがにクジラの類は魚類には分類されていません。「チョウザメ」以外は日本人にも身近な魚ですが、特に「サケ」の図が『図会』掲載のものと酷似していることは注目されます。



(※1, 2 の日本語表記は『フランス百科全書絵引』による。)





版木（本学所蔵）

板彫  
はんぼり



板彫  
はんぼり

板彫  
はんぼり  
今云板木屋

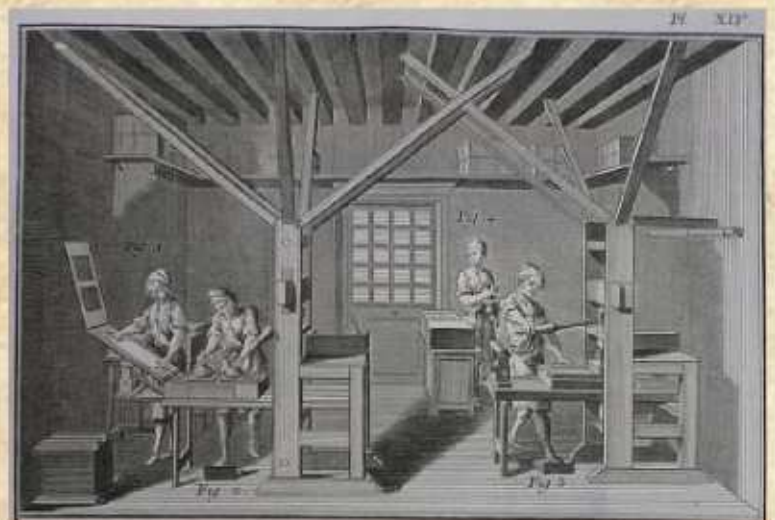
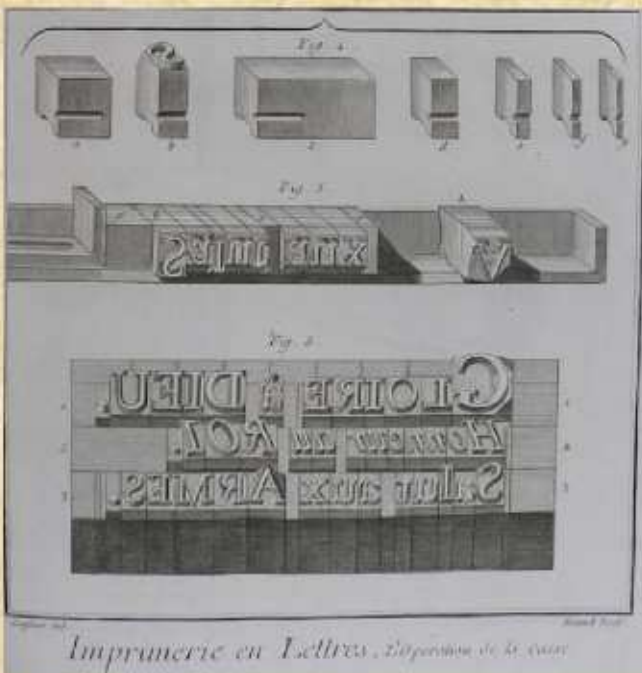
（版木を彫る職人）

印刷技術

日本である程度の規模をもった書物の印刷が始まるのは室町時代に入ってからで、主に寺院における仏典や漢籍の刊行が中心でした。以降、江戸初期の商業出版の確立期を経て明治初期に至るまで、日本の印刷書物は一貫して版木による印本が主流でした。版木に使う「梓」を「繡」り「？」む板彫達は、日本の印刷文化を影で支えた功労者といえましょう。腕の良い板彫の場合は書物の奥書に名前が記されることもありました。

近代の活字印刷は15世紀中頃にグーテンベルグが開発した技術を起源とします。この技術の確立は、大量の書物流通を可能にし、ヨーロッパ社会における宗教改革や後期ルネサンス文化の発達に大きく寄与しました。

なお、活字印刷機は天正少年使節の帰国時に日本にももたらされ、1591年から97年頃までは天草に設置されていました。



活版印刷機のある部屋

棚の上に数連の印刷用紙が置かれ、左端の職人が印刷機のチンパンに紙を広げ、次の男が活字面にインク着けするのに都合がよいようにインク用のボールでインクを調整しながら、印刷機から刷り上がる紙の刷りむらなどを点検すべく待っている。

（平凡社 『フランス百科全書絵引』より）

- 上 Sの活字と込め物
- 中 植字ステッキ
- 下 ローマン体とイタリック体で組まれた3行の活字セット



